

本との 出会いを 楽しむ

第 27 回

珈琲研究会の本棚

「自分らしく 生きるということ」

上村 観月

岩手県立盛岡北高校卒業。2020年弘前大学人文社会科学部文化創生課程入学。
弘前大学珈琲研究会メンバー。



近年日常のあらゆるところで「多様性」という言葉を目にするようになりました。確かに学校から国際的な場まで、昔よりもひとりひとりの違いを尊重し、理解し合おうとする時代になったと感じます。しかし本当の意味での「理解する」とはどういうことなのでしょう。今回はそんな多様性を謳う社会に向けた二つの作品を紹介します。

一作目は村田沙耶香の『コンビニ人間』です。この本は「普通」とは何かを考えさせられ、私も何度も読み返した作品です。自分らしく生きることは素晴らしいことですが、その生き方が周りから理解されない生き方だったら…。多くの人がある人を「普通ではない」と思うのではないのでしょうか。しかしそれは自分らしく生きることを認める「多様性」と矛盾しています。一方で自分とは違う価値観に出会ったとき、すべての価値観を理解できるかと言われれば、できないことがなんとも難しいところ。誰もが自分という基準を持っている限り、そこには数えきれない程の「普通」が存在します。そしてそれらとの相対的な比較によって普通か異常かが分けられるのが現代の実状です。その中で自分はどう生きるか、という問いをこの作品は投げかけています。普通とは。自分とは。そのような疑問を持っている人にぜひ読んでほしいです。

二作目は朝井リョウの『正欲』です。この本は私にとって「多様性」という言葉の意味をもう一度考え直すきっかけになった本です。

また、同時にかなり衝撃を受けた作品でもあります。私は今まで多様性という言葉や、それが尊重される動きに対し肯定的な印象を持っていました。しかしそれは自分が少数派でないから思えることであり、知らないところで排除されている人の存在をこの本から学んだのです。この本には社会的少数の人々がどんな思いを抱えて生きているかがリアルに描かれています。彼らの目線で見ると日常は狭く、非常に息苦しいものです。ですがこれは小説の中の話に留まりません。実際には知られていないだけで、身近にもこんな思いを抱えている人がいることは十分考えられるからです。

読み終わった後の心持は暗くなってしまうかもしれませんが、最後には何か残るものがありました。「多様性」について考える上で読んでよかったです。必ず思うはず。と必ず思うはず。と必ず思うはずです。

本当の意味での「理解する」とはどういうことか。その答えは私もまだ見つかっていません。しかしこの二冊には答えのヒントが隠されている気がします。皆さんもぜひ手に取って考えるきっかけにしてほしいです。

(うえむら みづき)

本館所蔵

「コンビニ人間」
村田沙耶香 著

913.6
Mu59k

開架図書（本館2F）

「正欲」
朝井リョウ 著

913.6
A83se

開架図書（本館2F）